

読書通信



No. 183

① コロナでうやむやになっていいとは思えないのが「桜を見る会」の真実である。モリカケも問題だが、桜のほうは政治資金規制法にもろに関わる。そんなわけで毎日新聞「桜を見る会」取材班『汚れた桜』（毎日新聞出版、1320円）でおさらいしてみた。昨年11月に参議院予算委で田村智子議員が爆弾質問して以来の一部始終が明快である。桜をめぐる何が起き、何が問題なのかが手際よく整理されている。

多くは新聞報道などで断片的に頭に入っていたことだが、この問題を最初から体系的にみて

みると物語は極めて単純なことがわかる。新聞記者たちの心中や取材現場が描かれるのもよい招待名簿の廃棄だとか、前夜祭での会費支払いのうやむやだとか、状況証拠からすれば安倍首相側は限りなくクロだが、それにしてもこんなことで国会という大事な政策論議の場が空転を続けていく日本という国が情けなくなる。

② 沖繩のことを、筆者も含め「本土」の人々はわかっているつもりでも実はほとんどわかっていない。少なくとも沖繩の人はそう思っている。これを被害者意識などといってすませてはいけないと、阿部岳『ルポ沖繩 国家の暴力』（朝日文庫、814円）を読んで思った。

名護市の北隣にある東村にヘリパッドが建設されることになり、抗議する人々を排除するた

めに機動隊員が500人も全国から集められた、その攻防の記録である。著者は沖繩タイムス記者で、現場に本土の記者は現れない。だから本土の人たちはこの一部始終をまるで知らずに終わった。ヘリパッドは首尾よく完成したのだが、その1カ月後、オスプレイが近くの海に、1年後には今度はヘリが近くの牧草地に、墜落した。そのときの高圧的な米軍の行動に著者は憤る。そして沖繩での作家百田尚樹の啞然とするような言動にも。沖繩の悩みはますます深い。

③ 筆者がアパレル業界を取材していた数十年昔、レナウンも楳山も三陽商会も、それを追う東京スタイルも（そして百貨店も）欧米ブランドの力を借りて飛ぶ鳥を落とす勢いだった。黒木亮『アパレル興亡』（岩波書店、2090円）

は東京スタイル社長の高野義雄（田谷毅一の名で登場）の特異なキャラを中心に描いた栄枯盛衰のノンフィクションである（2割くらいはフィクション）。東京スタイルに目をつけた村上ファンドや旧態依然のアパレル各社を尻目に台頭するユニクロが、村上世彰、柳井正の実名で登場する。栄華の夢いずこ、なかなか面白い。

④ 別の意味で檀乃歩也『北斎になりすました女』（講談社、1650円）も面白かった。どんな女の話かと思うが、北斎の娘、応為である。彼女が腕を磨き、北斎と共同して作品を完成させ、北斎死後は自分の作品を高値の北斎ブランドで売り続けた。北斎像もいいが、応為が光と影を見事に描いた話など捨てがたい。江戸文化を知るにも格好の作品である。（浅野 純次）